

## 闇に光る十字架 江戸の殉教者・原主水



取材協力  
溝部 脩司 教  
(高松教区)

不自由な体になり、友人や愛する人も全て失っていく。そんな状況で私たちは光を見いだすことができるでしょうか。

原主水は、下総（現在の千葉県）の臼井城主の嫡男として生まれます。父は北条家に仕え、豊臣秀吉との小田原の合戦に参戦しますが敗北し、江戸にて切腹。父を亡くした主水は小姓として徳川家康に仕え、京都の伏見へ行きます。主水は背が高く、勇猛な武将として名を馳せまします。その間、イエズス会の神父に出会い、1600年に大阪でモレホン神父から洗礼を受けました。

1603年、徳川家康が政権を握り、主水は20歳の若さで走衆（將軍警護役）の頭となり、家康に大事にされます。やがて家康は駿府城（静岡）を構え、江戸城は二代將軍の徳川秀忠に譲ります。主水も家康に従って駿府城へ移り、家康の警護にあたります。しかしその間、直接の原因はよく分かりませんが、主水は教会を離れています。原因の一つには女性問題であったと言われます。「密通の沙汰あり」「御殿に勤める女の一人をたぶらかした」と。恋仲であった奥女中と深い関係になったのでしょうか。

1612年、家康は全国に先駆け、キリシタン禁令を發布します。これは天領、旗本、奥女中などに対してでした。デイオゴ小笠原、大奥にいたおたあジュリアなどの信者が含まれています。この時、主水は行方をくらまし、一時期、耕雲寺に隠れていました。やがて逮捕され、駿府に連行され、安倍川の河原で両手の指を全部切られ、額には焼印を押され、両足の腿の筋を切られました。家康の走衆の頭として名声を馳せていたかつての栄光も失い、ハンセン病者の施設に運ばれました。かつて恋仲にあった奥女中は斬首、逃亡中にかくまってくれた恩人も斬首。愛する友人、愛する女性、恩人など、すべてを失った時、初めてキリストの本当の十字架が見えてきました。

いざり歩きする主水は、十字架上で嘲笑されるキリストの姿が目に見え、浮かんだことでしょう。彼はやがてフランススコ会が奉仕していた浅草のハンセン病者の施設で生活し、フランススコ会の影響を強く受け、フランススコ会第三会の「帯（コルドン）の組」の頭になりました。

不自由な体ではあっても、フランススコ会の第三会員として生涯を神にささげ、フ



ランシスコの貧しき、単純さ、十字架を思う生き方に学び、時とともに江戸キリシタンの中心人物となります。

1623年、主水のかつての部下が銀300枚の賞金に目がくらみ、町奉行に隠れ

江戸の殉教者（1人）東京教区

殉教者名	殉教年月日	殉教地	年齢
ヨハネ原主水	1623.12.4	江戸	

家を密告します。こうしてデ・アンジェリス神父、ガルベス神父とともに伝馬町牢屋敷に護送されました。そのころ、二代將軍秀忠は家光に三代將軍として將軍職を譲り、將軍職任官を祝うために全国の諸大名が江戸に集まっていました。家光は施政方針演説の中で、「私はキリシタンを徹底して認めない」と語ります。こうして家光は、諸大名にキリシタン禁令を通告し、捕らえたキリシタンを火刑に処するように命じます。

1623年12月4日、江戸の牢屋敷から日本橋、銀座、新橋を引き回され、品川に近い札の辻で宣教師と信徒総勢50名が火刑に処せられました。家康の走衆の頭として名を馳せた華々しい榮譽は失せていましたが、人間の弱さ、悲哀を味わった殉教者です。

深い傷を負った人生ではあっても、十字架の道に光を見いだしていく姿に現代への深いメッセージがあります。

## 危険を乗り越えた宣教 広島殉教者



取材協力  
結城 了悟神父  
(イエズス会)

遠山甚太郎は1600年、甲斐の国（現在の山梨県）で、浅野幸長の家臣の家に生まれます。幸長が関ヶ原の合戦の恩賞として与えられた紀伊の国（現在の和歌山）に入城した時、遠山家も有力な家臣として一緒に移りました。15歳だった甚太郎は、紀伊にいたフランシスコ会のアポリナル・フランコ神父に出会い、話を聞いて洗礼を受けます。彼は非常におとなしく、やさしい性格で、信心深く、心が広く、フランシスコの靈性に従って生きる道を選びました。やがて結婚し、妻も信者になったと思われます。彼の大きな家はすべての宣教師のために開かれ、紀伊での小さな教会のような様相でした。当時、和歌山には教会がなく、1614年に宣教師が追放されたこともあり、常駐の宣教師がいませんでした。けれども甚太郎は宣教師が訪れると宿を提供していました。やがて「甚太郎が宣教師に宿を与えている」という噂が広がり、舅は彼を呼んで「宣教師に宿を提供しないでください。危ないですから」と言うので、甚太郎はやさしい表情で「私にそのことについて何も言わないでください。自分は危険があることを十分知っています」と。1619年、彼の主君である浅野長晟が広島へ移り、彼もそれに従いました。

広島では福島正則が宣教を許可し、信者の共同体が残っていました。甚太郎はマチアス庄原市左衛門とヨアキム九郎右衛門と親しくなり、3人も広島島の教会のために命をささげました。甚太郎は広島に移ったあと、彼に洗礼を授けたフランコ神父が大村の牢屋に入れられたことを知り、見舞いに行く計画を立てました。イエズス会のポロ神父にそのことを打ち明けると「今は行かないほうがいい。今行ったらすぐ捕らえられて、牢屋に入れられる。神様の望みだったらいつか殉教者になる」と。この助言に彼は忠実に従い、自分の番を待ちました。彼の生活は信心深く、家ではよく祈る人で、宣教師からいただいたローマの聖母マリアの絵も大切にしていました。1624年2月16日、屋敷内の聖母像の前で斬首されました。24歳。

マチアス庄原は非常に身分が低い役人で、広島島の牢番でした。彼は投獄されていたイエズス会のアントニオ石田神父から洗礼を受けます。牢屋は狭く、屋根が低いこともあり、立つこともできない状況で、一日中横になっていました。不自由な牢での生活でも一つだけ便利なことがあります。そこには外に開かれた小さな窓があり、石田神

広島城



キリシタン殉教之碑



父はその窓を使って宣教していました。庄原はその窓から石田神父の話を聞き、洗礼を受けた一人でした。彼が信者になったら牢屋が教会になる。牢屋の内外で宣教師たちに積極的に協力していました。

いない所には、慈悲役がすべての慈悲の行いをします。例えば、病氣の人を見舞いに行くこと、幼児洗礼、葬儀、埋葬、要理など。彼は慈悲役として司祭と協力して奉仕した人です。

またヨアキム九郎右衛門は、広島に新しいお城が建てられた時、仕事があるからということと家族と共に田舎から出てきて、そこで洗礼を受けました。非常に信心深く、祈るのが好きでした。教会で奉仕し、司祭の慈悲役となります。慈悲役とは当時の伝道師のような奉仕職でした。司祭が

庄原は1624年2月17日、九郎右衛門

は同年3月8日、ともにはりつけの刑で殉教しています。死刑の場所は広島の己斐という所です。現在、広島市の己斐の丘の麓に広島の殉教者の記念碑が建立されています。

### 広島の殉教者 (3人) 広島教区

殉教者名	殉教年月日	殉教地	年齢
フランシスコ遠山甚太郎	1624.2.16	広島	24
マチアス庄原市左衛門	1624.2.17	"	34
ヨアキム九郎右衛門	1624.3. 8	"	65

広島城

